

令和七年度 専 願

博多女子高等学校

入学試験問題

国 語

注 意

- 一、合図があるまでこの冊子を開かないこと。
- 一、答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 一、問題の内容に関する質問は受け付けない。
- 一、途中退出は解答作成中の他の受験生に迷惑になるので認めない。

1

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

色の名前について考えてみましょう。

色の名前の品詞は何でしょう。英語ではどの色の名前も形容詞です。日本語はどうですか？「赤い」「白い」「青い」「黒い」「黄色い」

「茶色い」は「い」で終わり、どれも「△い花」のように形容詞の活用をします。

X

、緑、紫、灰色、桃色などはどうでしょう。

「緑イ花」とは言えません。また「緑ナ花」とも言えないので形容動詞でもあります。「緑色の（灰色の、桃色の、紫色の）花」と言わなければならないので、これらの色の名前は名詞のようにふるまいます。不思議ですね。

なぜこのような不規則なことになっているのかということについて、有名な国語学者の大野晋さんは、歴史的な^aためと言っていました。『大野晋の日本語相談』によると、古代の日本語には色の名前は赤、青、黒、白の四つしかなく、今で言う「デアル」のような意味の「シ」といっしょに、「赤シ」「青シ」のように使ったそうです。

その後「緑」「紫」などが加わり、さらに後になって「色」を加えた「桃色」「茶色」なども使われるようになったそうです。これらのことばが加わった時代には、「デアル」という意味を表すには「シ」ではなく「ナリ」ということばが使われるようになっていたので、「緑シ」ではなく、「緑ナリ」という形が定着し、「ミドリナ」「ミドリナル」のように、今の使い方に近い形で使われたようです。一方、「赤シ」「青シ」は「アカイ」「アオイ」など音が変化してそのまま^ア使われるようになったそうです。

^イ少し寄り道をしてしまいましたが、このようなことばの形と意味の対応関係の不規則性は、子どもがことばを学習していく上で、もちろん助けにはなりません。ただ、日本語を母語とする子どもと英語を母語とする子どもで、色の名前を覚える時期が大きく違うわけではないので、それほど大きな影響を与えるわけではないようです。

一歳前の赤ちゃんは単語を切り分けていく過程で、聞こえてくる言語の音に^b潜むさまざまな規則性をすばやく取り出して新しい単語を区切っていくのに使っていく一方で、例外にも上手に^cたいしょしています。意味の学習をする時も同じです。単語の形や文型のパターンと意味の間に完璧ではなくてもある程度規則的な対応関係があると、赤ちゃんはすばやくそれを見抜き、新しい単語の意味の推測に使います。でも、言語には常に例外があり、形と意味の間の完璧な対応関係というのは、どの言語でもほとんどありません。子どもは例外にたいしょするのもとても上手なのです。

でもひとたび色のことは^①の学習ということになると、子どもはなかなか色とことばの対応づけができません。子どもは色を見分けること自体は得意です。赤い積み木を見せて、「これと同じ色を見つけて」というと、喜んですぐ他の赤い積み木を選ぶことができます。でも「これは何色？」と聞くと何も言えなかったり、「しろ」など全然違う色の名前を答えたりすることがよくあります。でも、そのような間違いをしながらも、「赤って知ってる？」と聞くと「うん」と答える子どもが多いでしょう。

これは、単に一つの積み木や一つのおもちゃの車の色が「あか」と覚えることだけでは、私たち大人が使うように色の名前を言い分けることができるようにはならないところに、根本の問題があります。

^②色というのは絶対的に存在する物理的な量ではありません。物体に光が当たると反射しますが、その際、物体の特性に応じて一部の波長の光のみが反射します。その反射光が見ている人の目に届いて脳で処理されると、色の感覚が生じ、そのモノの色が感じられます。目に入る光の波長の違いが色の違いとして感じられるのです。

つまり、光そのものに色という性質はなく、さまざまな波長の光を受けた脳が色をつくっているのです。ですから、私たちが感じる色は連続的に変わっていくもので、最初からカテゴリーに分かれているわけではありません。しかし、言語はその連続体を「赤」「青」「緑」「紫」などのように、ことばでカテゴリーに分けます。しかし、その分け方に絶対的な必然性があるわけではありません。実際、色空間を色の名前どのように切り分けるのかについては、言語によってとても大きな違いがあります。

例えばアフリカのダニ族という部族の言語（ダニ語）では白（明るい色）と黒（暗い色）という二つの色しかありません。ですから彼らの「黒」は私たちが思う「黒」よりもずっと広い範囲のいろいろな暗い色が含まれています。タスマニア人の言語もまた、私たちの「黒」とずいぶん違います。でもダニ族の言語とは逆の意味で。彼らはワタリガラスのような黒、彼らの土地の泥の黒、炭化したキンマという木の葉がオリブ油と混ざった黒を、すべて違う名前で呼び、それらに共通の、私たちが思うところの「黒」にあたる一連の色を指す名前は持ちません。

日本語と英語の色の名前のつけかたはずいぶん似ています。日本語で区別する色は英語でも区別するので、日本語の一つ一つの色の名前に対応する英語の単語があります。ですので、なんとなく、日本語での色の名前は英語の辞書に書いてある名前に完璧に対応づけることができるような気がします。

X

実際には、日本語と英語の色空間の区切り方が完全に一致しているわけがありません。例えば、私たちが「薄茶（ベージュ）色」と呼ぶ色は、英語を話す人にとって“brown”より“orange”の範疇（はんちゆう）に入ります。

私がアメリカに住んでいた時、友人が飼っていた猫は、私から見ればどう見ても薄茶色でした。その猫のことを、友人はいつも orange cat と呼んでいました。鈴木孝夫さんの『日本語と外国語』によると、私たち日本人が絶対黄色とは言わない茶封筒を、フランス人は「黄色の封筒」と言うそうです。

つまり、連続的な色の空間を言語が名前で区切っていく時、いくつかのカテゴリーに分けるのかも言語によってかなり違いますし、仮に同じ数のカテゴリーに分けたとしても、一つ一つの名前の範囲をどこまでにするか（つまり隣の色との境界線をどこで引くか）^④もまた、言語によって違います。

つまり、色の名前を学習するということは、もともとは区切りがない連続した色空間を自分の言語がどのように区切っていくか、ということを経験すること、つまり、自分の言語がつくる色空間の地図を学習することに他ならないのです。

もちろん子どもは最初からぬり分けられた地図を見せられて、一〇以上の色の名前を一度に覚えるわけにはいきません。トマトの色は赤、イチゴの色も赤、消防車の色も赤、今日着ているTシャツの色も赤、というように、実にさまざまなモノについているさまざまな違う色を「赤」という一つの名前で呼び、それに少し白味が加わったところから桃色（ピンク）と言って区別する、あるいは黄色みが加わったところからそれはオレンジ色になる、というように少しずつ他の色との境界を覚えていく必要があるのです。このように考えていくと、色の名前を学習することは簡単ということはまったくなく、赤ちゃんや幼児にとってかなり難しいことであることが予想されます。

実際、そうであることが実験でも示されています。あるアメリカの研究者は、色の名前を知らない二歳はじめるくらいの子どもに "red" "green" "yellow" という三つの色の名前を教えました。この人は、いろいろな赤いモノを見せて「何色？」と聞きました。子どもが答えられなかったり間違っていたりしたら、「red」と教えて繰り返し言わせました。子どもがいろいろな赤いモノに一貫して正しく "red" と言え、"green" が正しく緑色のモノに対して言えるようになるのに、平均して八〇〇回ほどかかったそうです。"red" "green" "yellow" をきちんと使い分けられるようになるには一〇〇〇回ほどの繰り返しが必要だったとも報告されています。ただ、おもしろいことに、色の名前を数語覚えると、新しい色の名前はずっと覚えやすくなることもわかりました。それでも最終的に大人が日常的に使う色の名前を全部覚え、大人のように使い分けができるようになるには何年もかかります。

ある本では、群青色のことを「おおきい青」と言った子どもが書いてありました。青と群青色（紺色）が連続していて、「ぐんじょう」は青の一部だと理解していることがわかりますね。（ただし、この子どもは形容詞の使い方に苦戦していて、「濃い」を「大きい」

としてしまっています。)

このような間違いから、子どもは、あか、あお、しろ、くろ、きいろ、といった音をまず大まかに「色を表すことば」と捉えてストックすることからはじめていることが見てとれます。最初は、さまざまな色の名前を交換可能な同義語のように考えているのかもしれない。それからそれぞれ⑤の名前が色全体の地図の中のどの部分に対応しているのかを、じょじょに整理していくのです。

(今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』による。一部改変)

(注)

カテゴリー…範囲

範疇…範囲

問一 本文中の けい^a い^c たい^d しよ^e ぬり^e じょ^e じょ^e に適切な漢字をあて、楷書で書きなさい。また、潜^bむ の――線を施し

た漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中の二箇所①の空欄 X に共通して入る最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 例えば 2 つまり 3 すると 4 ところで 5 しかし

問三 本文中の その^ア まま^イ もちろ^ウ ん^エ どう^エ いろ^オ いろ^オ な^オ きちん^オ と^オ のうち、品詞が異なる最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

問四 本文中の 色のことばの学習^① では、何を学習するのか。最も適当な十五字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問五 本文中に 色^②というのは絶対的に存在する物理的な量ではありません とあるが、では、何が色をつくっているのか。最も適当な十四字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問六 本文中に 色空間を色の名前^③でどのように切り分けるのかについては、言語によつてとても大きな違いがあります とあるが、日本語と、A 「アフリカのダニ族の言語」、B 「タスマニア人の言語」とを比較した場合、それぞれのどのような言語の違いがあるか。A の特徴については、最も適当な四十三字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。B の特徴については、最も適当な三十二字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問七 本文中に 仮に同じ数のカテゴリーに分けたとしても、一つ一つの名前の範囲をどこまでにするか（つまり隣の色との境界線をどこで引くか）もまた、言語によつて違います とあるが、日本語を話す人と英語を話す人の違いがよくわかる具体例として、最も適当な一文を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問八 本文中の それぞれの名前が色全体の地図の中のどの部分に対応しているのか^⑤ を言い換えた最も適当な三十七字の部分を、本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問九 本文の内容に合致している生徒の発言として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 Aさん… 日本語の、赤い、白い、緑、紫、桃色、茶色、といった色は、歴史的に見て、古代の日本で全く同じ時期に生まれた色です。そしてこれらのことばには、ことばの形や活用と意味の対応関係の不規則性が見られます。
- 2 Bさん… 単語と意味の間にある規則的な対応関係にすばやくたいしよできる能力があるため、日本語を母語とする子どものほうが、英語を母語とする子どもよりも、色の名前を覚える時期が、圧倒的に早いという特徴があります。
- 3 Cさん… どの言語を母語にしようとも、すべての赤ちゃんは、大人が使うように色の名前をすぐに使い分ける能力を持っています。これは、連続的に変わっていく色を光でカテゴリーに分ける能力を持っていないからです。
- 4 Dさん… 二歳はじめくらいの子どもが大人のように日常的に使う色の名前を全部覚え、大人のように使い分けできるようになるには、何年もかかります。色の名前の学習は、幼児にとって簡単なことではありません。
- 5 Eさん… 子どもは、あか、あお、といったことばを、まず大まかに色を表すことばと捉えて、ストックし、じょじょに整理し始めます。なぜなら子どもは、色の名前を、交換可能な同義語のように考えていないからです。

2

次の文章は、『宇治拾遺物語』（一部改変）の一節である。これも今となつては昔のことだが、京の山科やましなの「四の宮河原」というところに、「袖くらべ」とよばれる商人の集まる所があつた。これを読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

その辺の下種げすのありける、「地蔵菩薩じざうぼさつ」を一体造り奉りたりけるを、開眼もせで櫃ひつにうち入れて奥の部屋など思しき所に納め置きて、世の営みに紛れて程経にければ、忘れにける程に、三四年ばかり過ぎにけり。

ある夜、夢に、おほちaを過ぐる者の声高こわだかに人呼ぶ声のしければ、「何事ぞ」と聞けば、「地蔵こそ」と、高くこの家の前にていふなれば、奥の方より、「何事ぞ」といらふる声すなり。「明日、天帝釈てんたいしやくのじぞうbゑし給ふには参らせ給はぬか」といへば、この小家のうちより、「参らんと思へど、まだ目のあかねば、え参るまじく」といへば、「構へて参り給へ」といへば、「目も見えねば、いかでか参らん」といふ声すなり。うち驚おどろきて、何のかくは夢に見えつるにかとおもひ参らすに、あやしくて、夜明けて奥の方をよくよく見れば、この地藏納めて置き奉りたりけるを思い出して、見出したりけり。「これが見え給ふにこそ」と驚き思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなん。

(注)

下種…身分の低い者	地蔵菩薩…仏のひとつ	開眼…新しくつくられた仏像に目を入れること	櫃…箱
地蔵こそ…地蔵さん	いらふる…答える	天帝釈…神のひとつ	じぞうゑ…地蔵菩薩を供養する会
構へて…必ず	いかでか参らん…参れそうもない		

問一 本文中の ^aおほち ^bじぞうゑ ^cおもひ の読み方を、それぞれすべて現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

問二 本文中に「忘れにける」^①とあるが、「忘れ」たのは誰か。また、高くこの家の前にていふ^②とあるが、「い」ったのは誰か。最も適当なものを、次の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|------|---|----------|---|-----|---|----|
| 1 | 下種 | 2 | 地蔵菩薩 | 3 | おほちを過ぐる者 | 4 | 天帝釈 | 5 | 作者 |
|---|----|---|------|---|----------|---|-----|---|----|

問三 本文中に「驚き」^③とあるが、その意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|--------|---|------|---|---------|
| 1 | 呼びかける | 2 | 目を覚ます | 3 | ハッと気づく | 4 | 逃げ出す | 5 | まばたきをする |
|---|-------|---|-------|---|--------|---|------|---|---------|

問四 本文中の「地蔵菩薩」はどこに納められていたか。最も適当な十字の部分をも、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問五 次の1～5のうち、本文の内容と合致するものには○、合致しないものには×を書きなさい。

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 下種が「地蔵菩薩」を見つけ出したのは、夢に見た日の夕方だった。 |
| 2 | 「地蔵菩薩」は、天帝釈に呼ばれた後、すぐに家から出ていった。 |
| 3 | 下種は夢を見た後、急いで「地蔵菩薩」の開眼を行った。 |
| 4 | 「地蔵菩薩」は、「明日、じぞうゑが行われる。」と言った。 |
| 5 | 「地蔵菩薩」は、「目が見えないので参れそうもない。」と言った。 |

3

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

悲しそうな、残念そうな顔をしろ。耳元で、俺が俺に囁いた。

水色のTシャツと自分の肌の間を、薄く形を変えた風が、す、と通り過ぎていく。自分の内側にあった I 気持ちがそのままじわりとにじみ出てきたような嫌な汗が、さらさらと浄化されていく気がした。

顧問は明らかに言葉を選んでいった。「やめる」という言葉を使わないで説明しようとしているのが見ていて苦しい。マネージャーはなんとなく事情を知っているような顔をして、ちよつと下を向いている。マジでかよ、と、隣にいる孝介が小声で呟いたのが聞こえた。

「つまり、まあ、ちよつと桐島きりしまはおらんようになるけど、副キャプテンの孝介中心に、とりあえず次の大会まで頑張ろう。だからリベロはお前な、風助」

油断していた。ふわつと、視線が重い空気となって自分に向かってきたのがわかった。孝介が、ひじでこつんと俺の体を突く。はい、と返事をしたけれど、^①なんとも頼りない声になってしまった。喜びも悲しみも、何の感情も帯びていない凜りんとした声を出すつもりだったのに。

「次の試合は桐島なしでのぞむことになると思う。だけど負けるわけにはいかん。わかつとるな」
はい、とメンバーの声が揃った。俺の声も、その中にうまく紛れることができたはずだ。

「何も動揺するなよ。いつも通りランニングからだ」

行け、と顧問が言うと、円になっていたメンバーがなんとなく崩れて、いつも通りに二列を作ろうとする。だけどいつも孝介と先頭を走っていた桐島が抜けた分、もたもたと列を作り直して、俺は孝介の隣につくことになった。いつもは俺の目の前でなめらかに動いていた背筋が、ない。

今日のボール、男子がミカサだっけー？ という弾むような女子の声に、おー俺ら俺らー、と孝介が答えて、なんとなくランニングが始まる。体育館のきらきらした床を II と踏みながら、俺はシューズの履き心地を整えた。

体育館はきらきらしている。二階の窓から光が差し込んできて、それらが反射してそこらじゅうを明るく照らします。色とりどりのというわけではないけれど、木の色が光って、とてもきれいだ。トン、と足に力を込めればその分飛べる。俺は、ボールの種類がミ

カサでもモルテンでもなんでも、とにかくバレーボールが床に弾ける音が好きだ。

Ⅲ

、と人数分の足音がリズムをきざむ。

「次の試合、」

孝介が前を向いたまま言った。

「お前、リベロとして出られるってことやな」

見なくてもわかる。たぶん孝介の口元は、ちよつとだけ、笑っている。

「お前……あんまそいうこと言わんほうがいい」

俺は少しだけ咎めるような声色でそう言った。うまく、そういう感じを出せていたらいいな、と思った。

「まあそうやけど」

窓からの光に、孝介の横顔が照らされている。太い首に通る筋がたくましい。

「ほんとはお前、ちよつとはうれしーやろ」

何言つとるんやて、とうまく言えたかどうかはわからないが、とりあえずランニングが終わって、パスと対人レシーブが始まった。俺はいつも桐島とペアを組んでいたから、孝介と日野のところにに入れてもらう形になった。

ボールからてのひらに伝わる感触は、やっぱりなぜだかミカサのほうが気持ちいい。肩をぐるぐると回してから、孝介にボールを投げる。孝介は日野に投げる。

少しずつ、日が短くなっていくのを感じる。部活が始まるころには、もう街はオレンジに包まれていて、着替えるときだってけっこう肌寒い。マネージャーは飲み物をつくりながら水飲み場で寒そうにしているし、顧問だってジャージを脱がなくなった。隣のコートからは女子の甲高い声が聞こえる。短いユニフォームから健康的に伸びた脚が、光をあびてふんわりと小麦色に輝く。

ほんとはお前、ちよつとはうれしーやろ。孝介のいたずらっぽい声が頭の中で反響している。頭蓋骨の中で言葉は弾けて、好きなように飛び交いだす。

グラウンドスパイクと、孝介が言う、はい、とメンバーから声が返る。いつもは桐島の声で指示が出ていたから、不思議な気持ちになる。

② 体の内側から漲ってくる力を感じる。うまく言えないけれど、運動神経が波打って、血がいつもより速く駆け巡っているような感

触。ほんとはお前、ちょっとはうれしーやろ。ほんとはお前、ちょっとはうれしーやろ。

グラウンドスパイクで、ボールがてのひらにぱちんとミートする感触が好きだ。ボールの芯を「とらえた」とわかると、本当に気持ちいい。俺は試合でスパイクをすることがないけど、きつとネットを越えて思いっきりボールを叩き落とすアタッカーは、もつともつと気持ちいいんだと思う。背が低い俺は、ネットの上からコートを見下ろしたことがない。いつだって低い姿勢で、上から叩き落とされるボールの底を見つめている。

桐島の鋭い目つきを思い出した。ボールのもようひとつひとつを捉えるように、低い低い位置からボールの底を睨み上げるような視線。

対人ー、という孝介の掛け声で、スパイクが飛んできた。両てのひらを重ねて、両腕で板をつくり、そこでずっしりとボールを受け止めたあと、膝のバネを使ってボールを上へと飛ばす。いったんボールを自分の中に受け入れてから、やさしく宙へ返す感覚。体が軽い。今ならどんなスパイクでも受けられる気がする。

(朝井リヨウ『桐島、部活やめるってよ』による。一部改変)

(注)

リベロ：バレーボールにおける守備専門の選手のこと

ミカサ、モルテン：競技用ボールの大手ブランド

問一 本文中の のぞむ ^a | ^c | ^d | ^f | 適切に漢字をあて、楷書で書きなさい。また、紛れる ^b | ^e | の——線を施

した漢字の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 本文中の I に入る最も適当なものを、次の 1～5 のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|--------|---|-----|---|----|---|-----|
| 1 | 明るい | 2 | なまめかしい | 3 | 優しい | 4 | 汚い | 5 | 美しい |
|---|-----|---|--------|---|-----|---|----|---|-----|

問三 本文中に ^① なんと頼りない声になってしまった。喜びも悲しみも、何の感情も帯びていない凜とした声を出すつもりだったのに とあるが、ここに見られる最も適当な表現技法を、漢字三字で書きなさい。

問四 本文中の

Ⅱ

 ・

Ⅲ

 に入る最も適当なものを、次の 1 ～ 6 のうちからそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|-------|
| 1 | どたどた | 2 | ザッザッザ | 3 | ふわふわ |
| 4 | テクテク | 5 | スタスタ | 6 | きゅつきゅ |

問五 本文中に ^② 体の内側から漲ってくる力を感じる とあるが、どのような感触を得たのか。最も適当な三十一字の部分を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問六 本文について述べた最も適当なものを、次の 1 ～ 5 のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 桐島がバレーボール部をやめたことで、俺はとても強く悲しみ、部活に対しておつてのような情熱を全く失ってしまった。
- 2 マネージャーは、突然の桐島の退部に動揺してしまい、バレーボール部員の全員に掛ける言葉を思いつかないでいる。
- 3 孝介は俺に、「お前、リベロとして出られるってことやな」、「ほんとはお前、ちよつとはうれしーやろ」と声を掛けた。
- 4 バレーボール部の女子達は、何かいつもと様子の違う男子バレーボール部員と顧問に対し、不審感を抱いてしまった。
- 5 顧問は、「わかつとるな」、「何も動揺するなよ」と副キャプテンである孝介をこっそりと呼び出し、励ましを伝えた。

